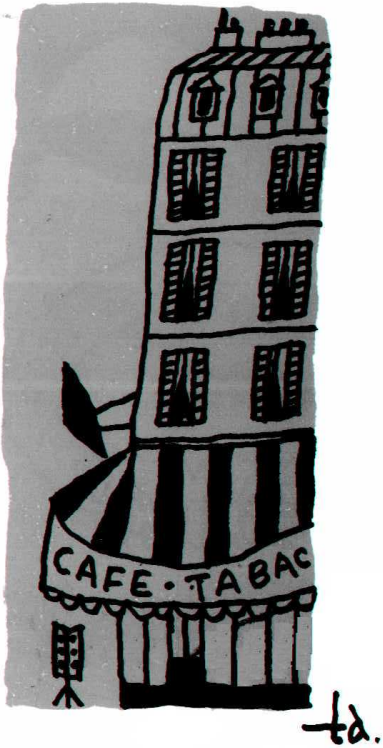
森村桂パリへ行く



講談社

〈同じ著者によって〉
森村桂香港へ行く（講談社刊）
森村桂沖縄へ行く（講談社刊）
12の結婚（講談社刊）
森村桂日本を行く（講談社刊）
いわせてもらえば（講談社刊）
森村桂アメリカへ行く（講談社刊）
二年目のふたり（講談社刊）
お嫁にいくなら（講談社刊）
Lサイズでいこう（講談社刊）
友だちならば（講談社刊）
ビジョとシコメ（講談社刊）
お隣りさんお静かに（講談社刊）
青春がくる（講談社刊）
おいで，初恋（講談社刊）
ふたりは二人（講談社刊）
結婚志願（講談社刊）
チャンスがあれば（講談社刊）
違っているかしら（オリオン社刊）（角川文庫）
天国にいちばん近い島（学研刊）（角川文庫）

森村桂 パリへ行く

1970年9月28日　第1刷発行

著　者　森村　桂

発行者　野間省一

発行所　株式会社　講談社
東京都文京区音羽2-12-21
郵便番号　112
電話　東京（942）1111（大代表）
振替　東京3930

印刷所　東洋印刷株式会社

製本所　加藤製本株式会社

定　価　360円

Printed in Japan　© Katsura Morimura 1970
落丁本・乱丁本はお取り替えいたします。

0095-124416-2253（0）（文1）

目

次

1 パリは人を泊めません……7
2 パリに魅せられた夫婦……27
3 パリいちばんのお菓子屋さん……61
4 ビクトルユーゴー街の天蓋付ベッド……79
5 マダム、どうかパリの思い出に……95
6 ドネ・モア・リー・アンド・マンジェ……113
7 トイレの窓からのぞいた顔……133
8 注射のこわいお医者さま……149

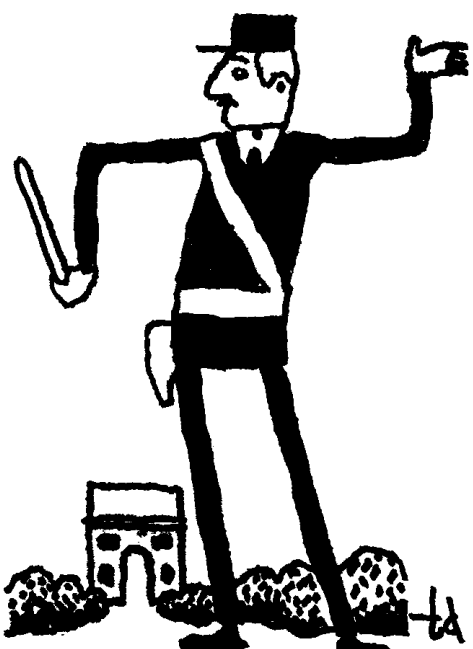
试读结束，需要全本PDF请购买 www.ertongbook.com

9 おなかが悪けりゃビフテキを……163
10 プチ・シャトーの住人たち……179
11 フランソワーズは大忙がし……193
12 レジは貸切り……219
13 ああガルソンめ！……235
14 計算なんて合わなくていいの……249
15 モリス邸での最後の晩餐……265
あとがき……278

装幀
宮田武彦

森村桂パリへ行く

1　パリは人を泊めません



「あ、ドウシボーだ」

飛行機がオルリー空港に着かんとした時、滑走路のわきの燃えるような初夏のみどりの草むらに止まっている灰色のトタン張りといった感じの簡素な車を発見して、私は思わず立ち上りかけた。ああ、なつかしいドウシボー、この車こそ、ニューカレドニアで、ムッシュ・ワタナベが乗っていた崩壊しそうなガタガタ車、フランスの国民車ドウシボーなのだ。ついに私は来た、フランスへ。

私はパリにあこがれ続けた。パリのお菓子に、パリの食事に。私は、ぜひともパリへ行き、おいしいというお菓子屋さんで片っぱしからお菓子を食べ、フランス人の家で、彼らが日常食べるフランス料理を食べ、そこに泊ってとっぷりとフランス人の生活を知りたくてならなかった。

だが、パリまでの道は、長かった。この二月の末に、もともと弱かった上に、疲れがどっと出て、身体を悪くし、ほとんど一切の仕事をやめて療養に励まなければならなくなって、パリ行きはあきらめなければならないところだったのだ。それでも、何とか持ちなおし、この六月八日、日本を発ったのだけれど、三日前からひいた風邪で、また身体がガタガタになったらしく、今も

试读结束，需要全本PDF请购买 www.ertongbook.com

熱っぽくて、食べものは、何を食べても味がなかった。

ああ、しかし、このドウシボーを見つけて、私の身体は急にシャンとした。飛行機のドアがあいて、私は、タラップを一番にかけ降りる。ムッとする暑さ、何という日ざしだろう。オフクロさまが、パリはまだ寒いというから、半袖は二枚しか持ってこなかったのに。

微熱と飛行機の疲れと寝不足で身体はちょっとフラつくけど、でもそんなことはもうじきになおる。私は外国にくれば不思議に丈夫になる上に、飛行場にはハーバー夫妻が出迎えに来てくれているのだ。これから六月末までの三週間、私はパリ郊外のバンセンヌのハーバー家で、ゆっくりとフランスの食事を味わい、ハーバーさんの知り合いの家を、何軒も紹介してもらえることになっているのだ。

これは私にとって、実にラッキーなことだった。パリへ行くことになって、私はすぐに、アメリカ旅行の時に紹介してくれた、ヨーロッパを通算三年間も旅行している先輩の三谷礼二氏に、紹介を頼んだのだけれど、いつも気やすくやってくれる三谷氏、どういうわけかしぶい顔をして、

「パリで人の家に泊りたいって？　それはやめろよ。無理だ。アメリカ人と違って、フランス人ていうのは個人主義で、排他的なんだから、絶対、人を泊めたりはしないんだよ」

それでも彼は四人ほど、知ってる人に手紙を書いてくれたけど、

「くれぐれもあてにしないほうがいい。パリにいると、たとえ日本人でも冷たくなるんだ」

と念を押されてしまった。その上、あてにしていた、結婚してパリに五年住んでいた友達は、

この四月に帰国してしまい、
「紹介したいんだけど、ごめん遊ばせ、子供同志はよく遊ぶけどさ、家に招ばれることなんて、まずないのよ」
親しい家などないといって、あっさり断わられてしまったのだ。それで困っていたところ、ついこの間、オフクロさまの若い友達でドイツ人の奥さんになっているマルさんに、ドイツから来た青年二人を、泊めてくれないかといわれて二週間ほど泊めたところ、マルさんが、このハーバー夫妻に手紙を書いてくれたのだ。そしてつい一週間前に電話があった。
「あのね、泊めて下さるんですって。一年前に結婚したばかりの、とってもいい御夫婦でね。子供はいないし、客間をあけてくれるっていうの。ふたりとも英語は話せるし、八日の何時に着くかっていって来てるくらいだから、大丈夫。案内もみんなしてくれるわよ」
ホテルにいるよか、扇子でもお土産にあげて、三週間ずっとそこにいさせてもらいなさいよといわれて、私はもう、何の心配もなく、パリにやって来たのだった。それにしても、世の中とは面白い。あの言葉の全く通じない二人を二週間、寝かして食べさせて、長いお風呂をエンエンと待って……、それは大変だったけど、でも、それだけのことで、パリの全ての生活が保証されるなんて、私は何て運がいいんだろう。
入国手続を受けながら、私はしばしぼんやりと感慨にひたり、重いスーツケースとハーバー家へのお土産のいっぱいつまったボストンバッグを、今ばかりは軽々と持ち上げて、さっそうと税

関を出た。

さて、どこからとびついてくるか。私は、さあっと、下品ではなく、エレガントにおっとりと、出迎えの人達をながめまわす。感じのいい、お金持そうな若いカップルは……と、

「森村さんですね」

私の肩をたたいたのは、小さな男の子の手を引いた、小柄でショートカットの美人の若い日本女性、

「大浜です」

「わ、すみません」

私はびっくりして大きな声でいった。三谷さんの親友の妹で、ハーバー家が現れるまではいちばんの頼りで、彼女たち夫妻の所に返事を頼むと、紹介された人達に書いたくらい頼りにはしていたのだが、ハーバー家が現れてからは、すっかり忘れて、飛行機の時間なんて知らせもしなかったのだ。

「どうもすみません、こんなとこまで。あのちょっと待って下さい。フランス人の方で……」

私は荷物を持とうとしてくれる大浜夫人の好意に感謝しながら、ハーバー夫妻に見つかりやすい税関の入口に立ちどまる。バカみたい、みんなあんなにいってたけど、こんな歓迎ぜめじゃないか。私はこの旅行がアメリカ以上にうまく行きそうなのに、もう心は踊り放題踊っていた。

「アベさんでしょ。おととい電話がかかってきました」

夫人は重いスーツケースを持って私をせきたてていた。
「阿倍さん？」
そんな人、紹介されてたっけ？
「ええ、バンセンヌのアベさん、御主人が今日から一週間アメリカへ出張なんで、迎えに行けないから、頼むって電話があったの」
「あ、そうですか、すみません」
私はなつかしい記憶を思い出した。そうだフランス語はHを発音しない、ムッシュ・ハヤシはムッシュ・アヤシ、ハーバーさんはアベさんとなる。確かに、出発の日が同じじゃ無理だ。だけど、何ていい人だろう。最初の手紙に連絡先は大浜家だとマルさんがいってくれたので、ちゃんと電話かけてくれたのだ。住所が解ってるから、ひとりでだって行けるのに。
「じゃあ、行きましょうか。ホテルはどこのホテル？」
「いえ、アベさんの家に泊めていただくんです」
私はゆったりといった。
「ううん、私もそうだと思って聞いたのよ。そしたら、主人は出張だから、帰ってからにして下さいって」
「一週間後ですか」
私はびっくりして立ちどまった。そんな、話が違う——。御主人は出張が多いけどかまわな

いっていってたのに。でも、仕方ない。私は念の為に聞いた。
「あの、それからはずっといいっておっしゃってました？」
「ええ、私もそれ聞いたの。そしたら奥さんが、メノン、二、三日っておっしゃるの」
「メノン？」
「ええ、とんでもないって意味よ」
「メノン」
私はオウム返しにいって絶句した。急に身体が熱く、息苦しいほどだるく、頭がポーッとなっていた。
「じゃあ、ともかくホテルだけは予約しなきゃならないわね。ちょっと待っててね、主人の知ってる人がいるから頼んでもらっておくから。今はすごく混んでるからいい部屋ないと思うけど」
そういって、彼女は、フランスの飛行機会社のカウンターに行くと、しばらくしてもどってきていった。
「よかったわ、やっとあって。安いのよ、三十フランですって。ええと、今、一フランが六十五円だから、二千円よ。お風呂もシャワーもないけど、主人の会社がシャンゼリゼだから近い方が何かの時にいいと思って、そこでいいわね」
「え、ええ、もう」
とはいったものの、この暑さ、御主人の会社に近いのはありがたいことだけど、シャワーもな

いとは。私は一刻も早く、汗を流してゆっくり休みたかったのに、すっかり気持が重くなってしまった。

「タクシーだと高いの、パリまでバスがあるからいいでしょ」

「は、はい」

そうは答えたものの、私は正直、いくら高くてもタクシーに乗りたいと思っていた。今やわが身体は、バスにきちんと乗っていることすら不可能なほど、フラフラになっていた。

「だめ、タッピー、こっちよ」

さっきから、ちょっと目を離せば、鎖をはずされた犬のごとく、パーッとかけて行く元気いっぱいの三歳の隆行君を彼女は追いかけていって連れもどすと、

「私も子供がいなければ、少しおつき合い出来るけど。ああ、暑いわ、今日はなんて暑いんでしょ。さ、タッピー、早くホテルへお送りして、パパの会社へ行くんでしょ」

大浜夫人は、いかにも暑くてたまらないといった顔で、ハンカチであわただしく顔をたたくと、フーッとため息をついて、バスに向って歩き出した。というと、彼女はホテルまで送りとどけてくれて、ハイ、サヨナラというわけか。私は今日こんな身体でシャワーもない部屋でどうしようかと途方にくれながら、

「すみません、ほんとに、こんな暑いのに」

とペコペコ恐縮し、何とか彼女にいやな印象を与えまいと、すがるような気持でついてまわ

试读结束，需要全本PDF请购买 www.ertongbook.com